

●**蛍の夕べと里山音楽会(6月13日)の参加者は大人6人、子ども11人、キジムーバンド8人、飛び入り1人、スタッフ9人の合計35人の参加がありました。**この日キジムーバンドは5曲を演奏して、クイズ等工夫した60分を老いも若きも、楽しめる時間を演出して頂きました。ありがとうございました。続いてのホタル観賞では、多くの皆さんが飛んでいるホタルや、足元の草むらのホタルに出会えて感激されていました。梅雨の中休みのように見える天気が続きましたのでホタルには厳しい条件と考えられていましたが、良く出てくれてよかったです。

●**木津川玉水浜での魚とり城陽市教委への協力 現地下見 6月22日(月)10:00~12:00**

27日(土)10時から予定している城陽市教委の魚とり会場の下見と打ち合わせをおこないました。会場現場は広い砂浜でしたが一面の砂が流れて小石がむき出しになり、先の増水で雑草は皆なぎ倒されていました。そして将棋頭水制の効果で溜りが形成され下流にワンドが昨年通り作られていました。本流の水量が少し増水していましたので幅を広くして流れていました。しかし一番心配なのが台風7号の進路と梅雨前線の移動、予想していなかった台風8号の2つが開催日近くに近畿地方に接近するという気配です。そのため25日(木)の朝に城陽市教委との連絡で中止することになりました。里山の会は27日(土)の午後にもう一つ開催される15:00からの防災教室の勉強会も計画されています。

●**6月20日(日)の京都新聞で吉村開君の活動が紹介されました。**



里山の会は長年オオムラサキの観察調査を約30年に渡って実行してきました。当初の頃には成体が確認できましたが近頃は成体はおろか幼虫も発見が難しくなってきました。中学3年生の昨年の暮れに幼虫を発見して飼育を行い、サナギから6月5日にオスが羽化をしました。それが写真3枚を加えた記事として紹介されました。そして6月23日にはメスが羽化をしたと報告連絡をいただきました。

幼虫の飼育のために水揚げの難しい食草のエノキの確保を12月から続けオスが羽化をし、今度はメスが羽化をしました。うまくゆけば産卵も予想されます。里山の会も発足時代から「オオムラサキの里」の里山農園を期待してきましたので、願ったりかなったりということです。吉村君の経験を活かして大きな夢の実現に頑張りたいと思います。上の写真は2020年ごろ発見した幼虫のため、エノキに放して試しに網をかぶせて成長を見守った時の写真です。メスが誕生しましたのでメスの写真も添付しておきます。



●**桜谷先生からコメントをいただきました。**

オオムラサキはチョウの中でも飼育が難しい種で、今回の羽化の成功は快挙です。

オオムラサキは卵からですと羽化まで1年近くかかりますし、越冬幼虫からでも半年ほどかかります。モンシロチョウやアゲハは卵から羽化まで夏場では1~2か月ほどです。また、餌植物のエノキは枝を切って水に挿しても水揚げが悪いので、エノキを栽培して飼育する必要があります。

京田辺産のオオムラサキの飼育、羽化の成功は、野生の個体が絶滅の危機に瀕しても保全に貢献できると思います。水族館などでは、サンショウウオ等を飼育して、野生個体が万一の場合でも保全に対応できるようにしているわけです。

オオムラサキの飼育結果を7月4日の観察会の際に発表してもらえれば、効果的かと思います。もちろん9月26,27日のきょうと生きものフェスでも。

さらに、この調子でオオウラギンヒョウモンの復活にも期待したいと思います。

オオウラギンヒョウモンの場合、幼虫の餌植物のスミレだけではなく成虫の吸蜜植物の自生も不可欠です。羽化時期の6月頃はアザミやクワの花、秋にはヒヨドリバナやフジバカマなどが成虫の吸蜜植物です。盛夏には成虫で休眠しているようです(その場所は不明)。これらの条件がそろえば、木津川堤防以外でも里山農園等でもオオウラギンヒョウモンの復活は夢ではないと思います。一般にチョウは移動能力があり、いずれこうした条件を見つけてチョウのほうでやってきてくれると思います。



切手になっているオオムラサキ

●蝶の標本お譲りします。 京都新聞記事を見てこんな連絡をいただきました。

昨日京都新聞に掲載された吉村開さんのオオムラサキの飼育羽化に関する記事を拝読しました。私は1977年の28歳の頃からチョウの採集を始め、シーズンには毎週末捕虫網を持って野山を飛び回っていました。左京区岩倉のギフチョウ、宝ヶ池のミドリシジミ、八瀬のキマダラルリツバメ、貴船のスギタニルリシジミ等、今では環境の変化で姿を消してしまった貴重な種類を保有しています。沖縄、屋久島、信州、北海道他にも遠征を行いました。保有しています標本の種類を添付しています。購入した希少種や海外のチョウも含まれ、標本箱が全部で28箱あります。高齢となってきましたので、チョウに関心の高い方に標本を継承いただければありがたいと考えています。(以下略)

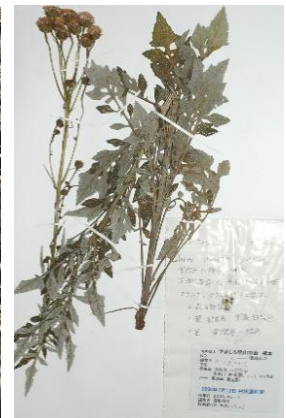
六月に咲く木津川の花



オオマツヨイグサ



キツネアザミ



ノビル



# オオムラサキ 高1が羽化

## 京田辺 発見の幼虫 エノキ葉与え半年



羽化して成虫となったオオムラサキ

京田辺市の高校1年生が、日本の国蝶で、環境省などのレッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されているオオムラサキの幼虫を育て、羽化に成功した。地元で長年、生息調査を続けてきたNPO法人やましろ里山の会は「近年は幼虫を見つけることも難しい。粘り強く成虫まで育てたケースは市内で初めてではないか」と拍手を送る。



オオムラサキの羽化に成功した吉村さん(京田辺市田辺)



屋外用ビニールハウスを改良し、自宅の部屋に設置した囲い

羽化させたのは、同会のメンバーでもある吉村開さん(15)＝同市田辺。中学3年だった昨年12月の誕生日に「普賢寺谷」と呼ばれる市内の里山で昆虫調査をしていたところ、幼虫を見つけた。幼い頃から生き物に興味があり、特に大好きな昆虫では、クワガタやゴマテラチヨウなどを育ててきた。数年前からオオムラサキの羽化に挑戦してきたが「幼虫の期間が長く、扱い方もデリケートなので難しかった」といふ。

## 準絶滅危惧種「里山に増やしたい」

自宅の部屋に屋外用ビニールハウスを改良した囲いを設置。幼虫の好物となるエノキの葉を絶やさないよう、自分で木も育てた。途中でさなぎが落下するアクシデントもあったが、なんとか乗り越えた。

今月の朝に羽化の兆しを確認し、「学校から帰ってきたら飛んでいた」と振り返る。青紫色の羽が舞う姿に「神秘的で、すごくうれしかった。ようやく報われた」と安堵感もあった。

やましろ里山の会は毎年夏や冬に観察会を開き、1998年からオオムラサキの生息調査を続けてきた。常務理事の山村武正さん(86)は「私たちが過去に山中で成虫と出会えたのは4、5回ほど。この経験を生かし、普賢寺谷をオオムラサキの里として発展させてほしい」と期待する。吉村さんも「雄と雌が増えて卵から育てることができればうれしい。京田辺にオオムラサキを増やすことが目標」と笑顔で話す。

(後藤創平)